70年代の光と影 シリーズ⑤

1975

時代を疾走した青春のベ平連と訪れた「解放」の日

吉岡 忍

あっけない幕切れだった。戦争が終わるときはこんなにあっけないものか、と拍子抜けした。

一九七五年四月三〇日、北ベトナム軍と解放勢力がさしたる戦闘を交えることなくサイゴン（現在のホーチミン市）に入城し、南ベトナム政府が崩壊した。米国が本格的に軍事介入した六五年から一〇年、フランス植民地主義との抗戦から数えれば三〇年におよんだベトナム戦争が、この日、終わった。

私は六七年春、大学に入学した前後からベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）のデモや集会に出かけるようになった。反戦バッジを作り、『ベ平連ニュース』の編集長を務め、十数人の脱走米兵をスウェーデンに送り出す地下活動をやり、反戦フォークゲリラに加わったりした数年間は、あっという間に過ぎていった。

午後になって、後ろ盾の政府が雲散霧消した南ベトナム大使館では、駆けつけた反政府系ベトナム人留学生たちが次々に逮捕されている、というニュースが流れた。心配になって出かけようとした矢先、ベ平連事務局長だった

吉川勇一さんから電話があって、彼らを釈放するよう警察に掛け合い、一段落したところだという。

その場にいっしょにベ平連で活動してきたアジア学者の鶴見良行、数学者の福富節男の両氏もいた。戦争終結を祝って乾杯しようという話になったが、ゴールデンウイークが始まっていて、思い当たる店はどこも閉まっている。私たちは当時私が暮らしていた杉並区東高円寺で落ち合い、小さな飲み屋に入った。

そして、乾杯！　それは、そのとき四〇代、五〇代の三人にすれば十年間の、二〇代半ばの私にしても八年間の思いを込めた乾杯――のはずだった。だが、ビールのグラスを合わせたあとで、ふいに四人ともが黙り込んでしまった。このとき降りてきた茫々（ぼうぼう）とした気配を、いまも私は思い出すことができる。

ベトナムはこの短くない年月、戦争の現実であっただけでなく、私たちの思考や行動の基軸ともなってきた。東西冷戦の狭間で、東南アジアの小国の民が米国を向こうに回して戦っているさまは、その戦いを政治的に利用しようとするソ連や中国を含め、大国による戦後世界の分割・支配という閉塞した状態に風穴を開けていた。

新聞もテレビも、米軍の戦闘機や戦車が貧しい村と農民を蹴散らす様子を伝えた。そのどれもが、かつて日本もあの残酷な加害者だったという苦い事実を思い起こさせた。日米安保条約に基づいて沖縄や本土の米軍基地に出入りする米軍機や空母の光景は、いままたこの国が加害者の立場にあることを痛みとして認識させるものだった。

「これから大変だな」

それはまた、敗戦のあとの二〇年から三〇年という歳月、この国はほんとうに変わったのか、という懐疑を広い範囲にわたって呼び覚ました。ファッションが大胆になり、音楽から湿っぽい叙情が消え、マンガが社会通念に挑み、芝居が屋外に飛び出し、映画がドキュメンタリーの度合いを深めていく……等々、この時期に起きた変動の底流には、既成の戦後体制から遠くへ抜け出したいという欲求が渦巻いていた。

ベ平連もこれらに先駆け、あるいは随伴しながら活動してきた。アメリカの新聞に意見広告を出す。ハワード・ジン（アメリカの歴史家）やジャン・ポール・サルトル（フランスの実存哲学者）らを招いて、ティーチインや集会を開く。ベトナムに直航するヨットを仕立て、戦争被害者のもとに直接に医薬品を届ける。脱走兵を匿（かくま）い、国外に逃亡させる。滑走路の前でたこ揚げをし、米軍戦闘機の発着を止める……。こうした活動の積み重ねが、政党や労働運動を通じなくても政治的姿勢を示せるのだという自信を多くの市民のあいだに植えつけていった。

ベトナムはこうしたすべての動きの起点でもあれば、駆動エネルギーでもあった。ベトナムというプリズムを通してあらためて考えてみれば、従来とはちがう位相、ちがった可能性が開けてくる。小国の民が超大国を翻弄し、追い詰めているというグローバルな現実が、「やればできる」という楽観の追い風になった。

しかし、ベトナム戦争の終結は、その追い風としてのベトナムがもはや存在しなくなることを意味していた。そのことに気づいて、私たちは押し黙った。「これから大変だな」「これからの方がもっと大変だぞ」と吉川、鶴見、福富氏らはみずからに言い聞かせるように言い、私もうなずきながら、途方に暮れていた。

私についていえば、その大変さの最初の波は、七〇年代後半にやってきた。ベトナムでの決着につづいて、カンボジアやラオスまでインドシナ全域に及んでいた戦争は終息したものの、その後に大規模な難民問題が持ち上がっていたからだ。

ベトナムでは、社会主義化を嫌った人々が海洋へ乗り出し、「ボートピープル」となった。ラオスからは土地伝いにタイに逃れる人々がいて、彼らは「ランドピープル」と呼ばれた。独裁

右写真
神奈川県横浜市にある米軍基地（通称＝横浜ノース・ドック）。かつてここから大量の兵器がベトナムに向けて運び出された。
撮影／竹内美保

70年代の光と影

時代を疾走した青春のベ平連と訪れた「解放」の日

1968年2月1日、「テト攻勢」に参加して捕まった解放戦線の一人が、サイゴンの路上で国警長官に公開処刑された。この映像は世界中に流され、反戦運動がピークを迎えた。（提供／AP・AFLO）

東京新宿駅西口広場では連日、ベトナム戦争に反対する市民運動「ベ平連」の若者たちによる「フォークソングの集い」が開かれた。週末には3000人にも膨れあがった。写真は1969年5月24日。（提供／共同通信）

慣がちがう」といった政府の弁解は諸外国からの批判を浴びたが、その背景に頑迷な「日本単一民族説」があることは言うまでもなかった。

その間にも、新宿や池袋の飲食街には若い難民たちが入り込み、洗い場や調理場で働き始めていた。回転寿司屋で寿司を握っていたラオス人もいれば、印刷所の徹夜仕事に明け暮れるカンボジア人もいた。六畳間に十数人が雑魚寝し、そこに潜り込めない難民は山手線の電車内で眠っていた。病人もいれば、治療を受けられないまま死んでいったベトナム人僧侶もいた。

私は、知り合いが難民支援の活動をしていたことから関わるようになり、友人らに身元引受人になってもらう一方で、定住許可や難民認定を求める裁判を起こす手伝いをすることになった。一人ずつ難民になった事情を聴き取り、上申書にまとめる役を引き受けたのだが、私はインドシナの言葉も生活事情も不案内だし、相手の日本語もカタコトだったから、十数人分の上申書を作るのに四週間もかかった。

寝不足が続いたある日、数人の難民が訪ねてきた。ベトナム人、ラオス人、カンボジア人もいて、いずれも各グループのリーダー格の若者たちだった。普段はふざけ合う仲間だが、そのときはなぜか深刻な顔をしている。私より年上の、印刷所勤めのカンボジア人が進み出て、こう言った。

――あなたはベトナムやインドシナの戦争に反対する運動をやってきた人でしょう。私や私の親たちが支持してきた政府を批判してきた人ですね。政と虐殺が日常化したカンボジアからも、膨大なランドピープルが出た。台湾留学中に戦争が終わり、家族が離散してしまったこれら三国の若者たちは観光ビザで東京にやってきて、不法滞在者になった。主には中国系住民の彼らは「エアピープル」だった。

難民たちとの日々

こうした難民の総数は百数十万人に達し、やがてその半分以上を米国が、カナダやオーストラリアや欧州諸国も十数万人から二万人を受け入れることになる。しかし、当時の日本は突出して及び腰だった。「国土が狭い」「生活習

治的立場がちがうのに、なぜ徹夜までして私たちを助けるのですか？

たどたどしい日本語だった。だが、それだけにそれは、まっすぐな質問だった。その場の全員がこちらを見つめているのは、事前に相談してきたからにちがいない。これは真正面から答えなければならない。とっさに私は、そう感じた。

私は言った――あなた方が支持した政府は間違っていた、と私は思う。その考えはいまも変わらない。けれども、意見がちがっても、日本で暮らしたいというあなたたちの気持ちを尊重し、実現させるのは、日本人である私ができることだし、責任だと思う。

異文化との共存

建前のような返答であることを、私自身が感じていた。しかし、形式や建前をきちんと言うべき場面というものがある。そう言わなければ、互いに異文化を抱えた人間同士の意思は通じ合わない。大事なことは、口先の建前に終わらせるのではなく、その通りにやってみせることではないか。

難民たちが本音を言い、わがままも含めてざっくばらんな姿を見せるようになったのは、このやりとりのあとだったように思う。私はその後、食事やピクニックに誘われるようになったし、彼らも私のアパートを訪ねてくるようになった。それから数カ月後の七八年初夏、彼ら全員に定住許可が出た。

そんなある日、私は赤坂の奥まった住宅地にあった旧カンボジア大使館を訪ねた。本国では混乱が続いていて、そのころの大使館は主を失い、二十数組の難民家族が住みついていた。行ってみると、なにやら騒がしい。老婆が泣きわめき、若い女たちがとりなし、男たちがそわそわしている。

四階の部屋で家族と暮らしていた老婆が「もう何日も眠れない」と訴えていた。ストレスや病気が原因ではなかった。一階の入口フロアに置いてある大きな仏像のせいだという。老婆は「仏様の頭上で寝るなんて罰当たりなことをしていると思うと、眠るどころじゃない」と言い、泣きながらくずおれた。

私は虚を突かれ、しかし、その場の光景がずしっとのしかかってくるのを感じた。これからこの国は、こういうさまざまな異文化と同居する世の中になっていくのだろう。ときとして感情がむきだしになるが、その背後にある理屈が即座にはわからないまま対処しなければならない。

この騒動を収めたのは、私が定住許可取得を手伝った若い難民だった。彼は数人の仲間に声をかけると一階フロアに入っていき、そこに鎮座していた仏像をあっという間に庭に運び出した。あとで聞いたところでは、そこに自分たちで小屋を建て、木彫りの仏様に雨風が当たらないようにして、祭壇も作ったという。それ以後は、もちろん老婆も落ち着いて眠れるようになった。

その後も、てんやわんやはつづいた。洗濯工場の住み込みで働いた難民家族は、「給料をピンハネされている」といって半年で夜逃げした。しかし、それはピンハネではなく、給料から差し引かれる厚生年金等のことだった。

後になって、「なぜ黙って逃げ出したのか」と雇用主に問われたとき、難民たちは「私たちが悪者になれば、あなたは傷つかないから。一時でもお世話になった人を傷つけたくなかった」と答えた。それが彼らの側の気遣いだった。

七〇年代後半から八〇年代いっぱい、日本ではさかんに「国際化」「ハイテク化」が叫ばれ、戦争で疲弊した米国経済を押しのけるように、メード・イン・ジャパンの家電製品や自動車が世界中を席巻した。しかし、私にとっては、「仏様の上では眠れない」と泣きわめいた老婆とどうやってひとつ社会で暮らすのかということの方が、ずっと切実な国際化問題だった。それからまた二〇年が過ぎ、日本製品の隆盛は影をひそめたが、異文化の他者との共生は、いまだ私たちの課題であり続けている。

よしおか　しのぶ・作家。

（月一回の掲載です）

1975

一九七五年四月三〇日、北ベトナム軍の戦車が南ベトナム大統領府の門を突破。この日、ベトナム戦争は終わった。（提供／AP・AFLO）

1973年のパリ和平交渉で米国、南ベトナム、北ベトナム、南ベトナム臨時革命政府（解放戦線）の4者が和平協定に署名し、いったん戦火が収まったかにみえた。しかし、数日後には再び戦闘がはじまった。撤退時期を探っていた米国軍は3月にベトナムから最終的に引き揚げ、8月にはカンボジア爆撃も終了。この時点で米国の同国での軍事活動は終わった。戦いは南北ベトナム人同士で続いた。米国の後ろ盾を失って士気が大幅に下がった南ベトナム軍は総崩れとなり、北ベトナム軍と解放戦線は75年に入り急速にサイゴン（現ホーチミン）市に迫った。市内が大混乱に陥る中、4月30日にほぼ無血のうちに市内に入った。米国軍が約5万8000人の戦死・事故死者を出したのをはじめ、南ベトナム軍約25万人、北ベトナム軍と解放戦線は90万人など計300万人の命を犠牲にして、足かけ12年にわたった戦争は終わった。